

機関番号：64401

研究種目：基盤研究 (A)

研究期間：2007~2010

課題番号：19251013

研究課題名 (和文) 先史アンデス社会における権力の生成過程の研究

研究課題名 (英文) A Study of the Formation Processes of Power in the Prehistoric Andes

研究代表者

關 雄二 (SEKI YUJI)

国立民族学博物館・研究戦略センター・教授

研究者番号：50163093

研究成果の概要 (和文)：

本研究では、南米のアンデス文明における権力生成過程を、祭祀遺跡（ペルー国北高地パコパンパ遺跡）の発掘と出土品の分析を通して追究した。当該遺跡の利用は、I期（B.C. 1200-B.C. 800）とII期（B.C. 800-B.C. 500）に細分され、I期においては、社会的不平等性は見あらず、構成員の自主的な参加に基づく祭祀活動（神殿建設・更新）が認められたのに対して、II期には金属生産とその分配を基盤にした権力者が登場したことが判明した。

研究成果の概要 (英文)：

This study aims to clarify the formation of power in the Andean Civilization of South America through the excavations of the ceremonial center (Pacopampa archaeological site in the north highlands of Peru) and the analysis of the archaeological remains. The chronology of the Pacopampa site was reworked into Phase I (B.C. 1200-B.C. 800) and Phase II (B.C. 800-B.C. 500) by our team, and it turned out that in the Phase I social inequality was not found, and the religious activities (construction of temples and their renovation) were based on voluntary participation by the community's member, while in the Phase II the person of power appeared, and the main source of his/her power depended on the production of metal and their distributions.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	9,200,000	2,760,000	11,960,000
2008年度	9,000,000	2,700,000	11,700,000
2009年度	8,400,000	2,520,000	10,920,000
2010年度	6,800,000	2,040,000	8,840,000
年度			
総計	33,400,000	10,020,000	43,420,000

研究分野：アンデス考古学・文化人類学

科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学・民俗学

キーワード：(1)考古学、(2)文化人類学、(3)文明、(4)複雑社会、(5)権力

## 1. 研究開始当初の背景

本研究立案の理由は以下の3点である。

(1)従来の文明研究は、農耕の起源などのように、経済的基盤の解明に精力が注がれ、いわゆる唯物史観で解釈されることが多かったという点である。これは、ひとえにメソ

ポタミアに注目する旧大陸の研究状況に縛られてきたからであり、アメリカ大陸の古代文明を研究するには、モデルの妥当性について批判的検証を行わなければならない。そのためにも、経済的基盤に偏らない解析モデルを採用する必要があった。

(2)その点で、日本人研究者が長年にわたって蓄積してきたデータは、上記の検証を行うには十分であり、実際に、1998年に出版された『文明の創造力』（加藤泰建・関雄二編 角川書店）において、「神殿更新説」というモデルを提示し、唯物史観を批判した。ここでは、祭祀的基盤（神殿建設や儀礼）への投資が経済的基盤への投資に先行し、それによって経済的基盤が活性化されるという唯物史観とは全く逆の見方を示した。しかしながら、このモデルは、特定の遺跡や年代には適用が可能であったが、形成期後に登場する国家や支配者集団の出現を説明するモデルとしては十分ではないことが判明してきた。そのため、時代と地域を越えて、文明形成を論じることができるモデルが必要となった。

(3)第三の理由としては、アンデス考古学における権力論の相対化の必要性があげられる。アンデス考古学でこれまで取り上げられてきた権力論は、文明の最終期であるインカ帝国を、主に歴史文献を基にモデル化し、それがどこまでさかのぼることができるのかという視点で、アプリアリに先インカ期に当てはめてきた経緯がある。そこには、インカ以前の数千年前より「アンデス的」なる伝統が必ずや存在し、インカまで連続するという暗黙の前提がある。しかし、ポストコロニアルの見方からすれば、この歴史的連続性には、どこにも保証がないことは自明であり、個々の歴史的状況を踏まえた上で、様々なアクター間の政治的交渉の過程を見ていかねばならない。その意味で、インカモデルに毒されない、より中立的な解析モデルを設定し、文明初期の状況を解釈していく意味は大きい。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、50年間継続してきた日本のアンデス文明研究の成果を踏襲しながらも、新たな分析視点と分野横断的な手法を発掘調査（ペルー国北高地パコパンパ遺跡）に導入することにより、複雑社会（complex society）、いわゆる文明の成立過程を追究し、人類史の構築につなげることにある。具体的には、権力の発生と、その変貌という視点を先史社会の分析に導入する。この場合、権力を生み出す基盤として、経済、軍事、イデオロギーといった権力資源を想定し、リーダー（後の支配者）がどのような資源の組み合わせと操作で、目的を完遂しようとしたのか、これに対して権力を行使される側はどのように反応したのかを明らかにしていく。なお3つの権力資源については、発掘調査、遺物分析を通して比定していく。

## 3. 研究の方法

ペルー北高地カハマルカ県に位置するパコパンパ遺跡において集中発掘を実施し、出土遺物の考古学的、理化学的分析を現地および日本にて行い、あわせて地質学者による一般調査を行った。これらの一次資料を解析し、研究目的である権力論に結びつけるため、以下の視座と分析視点を採用した。

### (1) 経済面での権力行使の解析

生態環境を基盤に生み出される生産物、技術、物流へのアクセスを限定することで権力は生じうる。これを生産・流通・消費面で解明していく。まず生存経済（サブシステム）については、生態資源や地下資源の分布、および河川や耕地と遺跡の位置関係に注目し、食糧生産への操作を考察する。また灌漑や農業用テラスなどの遺構同定、農具の分析から生産性に関わる権力操作の有無や強化を論じ、祭祀建造物の建築材や工法などに注目することで、労働力や労働単位などを析出する。

流通と分配に関しては、備蓄用倉庫の存在を確認する作業が、権力者のコントロールの有無を論じる際に不可欠である。消費に関しては、食糧を構成する植物の遺存分析、人骨のコラーゲンをを用いた食性解析、獣骨分析などから、食物摂取における集団間の差異などが抽出していく。

さらに生存経済とは別に希少価値のある奢侈品にも注目する。原材料や完成品の入手、流通、消費の状況を明らかにしていくことで、権力資源として操作される状況を把握する。

### (2) 軍事面での権力行使の解析

戦争は、強制的な権力行使の手段である。この点については、遺跡の立地分析を通じて戦略性の有無を考察し、遺跡より出土する武器、防衛や攻撃に関わる遺構の検出を通じて論じていく。また出土人骨の分析より殺傷痕など闘争を暗示する証拠に注目していく。

### (3) イデオロギー面の権力行使の解析

信仰、行為、儀礼、物質文化の特定パターンを通して、社会や社会組織の存在理由、権力行使の理由を制度化していくことが予想される。そのためには、儀礼、象徴財、公共建造物など可視的な手段を用いてこの面が強化されていくことが予想され、この観点に基づく出土遺物や遺構の分析を行う。

### (4) 権力要素の相互関係

上記の権力資源への視点は、単に分析の枠組みであり、個々の文化の脈絡の中で、具体的な資源を比定していく必要がある。また各権力資源は独立して存在するのではなく、錯綜した相互関係が存在し、その様態も多様である。これを抽出すると同時に、他の遺跡や時代との比較を行い、文明形成のマクロ的分析

を試みる。

#### 4. 研究成果

パコパンパ遺跡自体は、自然の尾根を利用した3段の巨大な基壇より構成される。地形測量の結果、3つの基壇全体で約4haを占めることが判明した。最上段である第3基壇は、幅が100m、奥行きが200mと、最も規模が大きく、遺構も集中しているため、発掘調査もここを中心に実施した。以下に得られた研究成果をまとめる。

##### (1) 編年の確立

まず集中発掘調査、遺物分析、年代測定の結果、パコパンパ遺跡の利用は、I期(紀元前1200～紀元前800年)とII期(紀元前800～紀元前500年)に細分されることが判明した。こうした編年の確立は、理論に走りがちなアメリカ考古学ではおろそかにされてきた点であり、基礎研究として大きな意義を持つ。

##### (2) 一次資料のGISデータベース化

遺跡周辺の2次元の地形図(25万分の1, 10万分の1, 2万5千分の1)および3次元の数値地図(DEM: Digital Elevation Model)を入手し、作成した遺跡周辺の地形測量図(Plano General de Pacopampa)と併せて基図とした。そこに時期別の遺構図面、写真、遺物台帳などを関連付け、空間的な情報を持ったデータベースを構築した。これにはESRI社のArcGIS, Spatial Analyst, 3D Analystを採用した。

##### (3) 考察: I期における権力の様相

###### ① 遺構からの考察

I期において、すでに大規模な基壇状構造物の建設が開始され、また建物の度重なる更新が行われたことも判明した。基本的には、基壇状構造物を埋めては拡張していく「神殿更新」が行われたと考えられ、この点は、従来から、日本調査団が重視してきた文明の原動力としての祭祀建造物の建設と更新というモデルが適用できることが再検証されたことになる(考古学的分析)。

また更新過程において、全体の建築プランの基礎となる建築軸に若干の変更が認められ、これが、農耕、ひいては豊穰性と関連する星座スバルの出現場所の変化と連動している可能性が、精密な測量により新たに指摘された。いわば、祭祀施設と農耕の豊穰性が景観を介して結びついていることが検出されたことになる(景観考古学的分析)。

一方で、権力者の存在を示唆するような墓は発見されておらず、構成員が自発的に協同労働に参加する社会であったと考えられる。

###### ② 遺物分析からの考察

建築に用いられた石材が石灰岩であり、そ

の産地がパコパンパ遺跡近くであることが判明した。巨石の運搬には組織労働が必要と考えられるが、遺構の説明で述べたように指導者の痕跡はない(地質学的分析)。

土器は、同時代のアマゾン上流域との関係性が指摘でき、またネコ科動物、猛禽類、ヘビなどの動物図像が刻線や彩色で描かれたが、人間と複合するような図案は見あたらない。属性から来る動物への崇拝が存在したことは伺われるが、祭祀を通じた権力掌握を示唆するものではない(土器分析)。

この点は、遺構の分析結果とも一致するが、これは直ちにI期が平和的な時代であったことを断定するものではない。実際に、儀礼的意味合いが強いのであろうが、カニバリズムを痕跡も同定されている(形質人類学・動物考古学の共同解析)。

経済面については、まず動物性タンパク質は、野生のシカを狩猟することにより得ていたことがわかった(動物考古学的分析)。また植物性食糧に関しては、ジャガイモ、マニオクなどの根菜類の摂取が認められ、トウモロコシなどの穀類の利用はほとんどなかったと考えられる(デンプン粒解析・コラーゲンによる食性解析)。余剰生産物を備蓄する倉庫も検出されていないことを考えると、I期における経済基盤はさほど強固なものではなかったことが想定される。

I期における軍事の証拠はない。

##### (4) 考察: II期における権力の様相

###### ① 遺構からの考察

II期になると、建築活動は全く異なる様相を示す。I期末の建築軸を踏襲しながらも、中心的な空間に窪んだ方形広場(半地下式広場)を設け、その周囲三方に低層基壇を配するようになる。半地下式広場を構成する四方の壁の中には、それぞれ階段が設けられていることが本プロジェクトにより確認された。

また広場の西側に設けられた中央基壇の内部、しかも中心軸上で一基の墓が発見された。中央基壇の建設直前に造られ、埋められた後、床が張られていることがわかっている。いわば、この建物に力を込めるための儀式の一環として重要な人物が埋葬されたと考えられる。この現象は、以前、日本調査団が発掘したクントゥル・ワシ遺跡クントゥル・ワシ期のケースと類似しており、この時代にペルー北部で、社会的地位の高い人物が出現し始めたことが示唆される。

さらに、墓が設けられた中央基壇には連続する形で小部屋が築かれ、部屋へのアクセスも限定されたことが明らかになった。これは、祭祀空間へのアクセスが一部の人間に限定されていたことを示し、先の墓の存在と併せて権力の出現を推測させる(考古学的分析)。

なおII期の後半では、広場の4つの階段

が封印され、代わって広場の隅に2つの階段が新設されると同時に、広場中央に、建築軸を異にする小基壇と部屋が築かれた。こうした建築軸の変更は、星座と豊穰性の関連性が失われ、世界観に大きな変更が生じたことを示すものである（景観考古学的分析）。

### ②遺物分析からの考察

他の遺跡との比較の指標となる土器については、I期とは全く異なり、多彩色土器が激減する。ネコ科動物や猛禽類はあいかわらず登場するが、刻線のほかに立体的な象形土器が新たに登場する。人間との融合においては、土器以上に石彫で認められる（土器分析）。

建築用の石材は、I期で利用された採取地は石材が枯渇したためか、別の場所から持ち込まれた。また石器については、銅の二次鉱物である孔雀石、珪孔雀石、藍銅鉱を細工したビーズ玉が製作されたことがわかっている。こうした鉱物の原石を産出する鉱山が遺跡からさほど遠くない場所である点も本研究で明らかになった（地質学的分析）。

また銅の二次鉱物は、銅製品の原材料としても利用されたことが鉱滓の検出によって明らかになった。針や留めピンなど銅製品の出土量は、同時代の他の祭祀遺跡を圧倒しており、パコパンパ遺跡が銅製品生産の中核地であったことが推測される。銅製品自体に実用性は認められるが、装飾もあり、祭祀の脈絡で利用されたことは否定できない。この点は、いわゆる経済活動がイデオロギー面と密接に結びついていることを示すものである（地質学的分析・蛍光X線分析）。

獣骨分析の結果は、ラクダ科動物の飼育が開始されたことを示しており、衣服の材料としての毛ばかりでなく、運搬手段としても利用された可能性がある（動物考古学的分析）。

また栽培植物は、低地で栽培されるマニオックが姿を消し、ジャガイモなどの高地性根菜類、さらにはトウモロコシの栽培開始を示している（デンプン粒解析・コラーゲンによる食性解析）。トウモロコシは、アンデスにおいて儀礼の供物、あるいは祭祀用の酒として利用されるため、II期にそうした利用が開始された可能性はある。

なおII期でも軍事の証拠は認められない。

### ③貴人墓の分析

上記の分析に加え、世界的な発見でもある貴人墓の被葬者、副葬品の分析を行った。墓坑の直径は1m、深さは1.5mほどであった。上部には大型の石が2つ重なるようにして蓋の代わりをつとめ、そこから1mの深さまでは埋土が続く。その後、安山岩の平石が水平に並べられたレベルに達した。平石の下からは完形土器が4点出土した。北側に小型ボトル、南側に取っ手と注口を持つ二重円文の鉢、

高坏とその上に載った小型の鉢が置かれ、明らかに方位が意識されていた。高坏には炭化物がたまっており、その上に載った小型の鉢で何かを熱したものと考えられる。いずれにしても、埋葬時における葬送儀礼の一部を検出したことになり、アンデス考古学でもまれな発見であった（考古学的分析）。

土器が置かれたレベルから下は、穴の口径がすぼまり、60cmほどになる。穴には安山岩製の平石が斜めに潜り込み、その下より被葬者の骨と副葬品が出土した。被葬者は横臥屈葬状態で北を向き、性別は女性、身長162.1cm、頭蓋変形と齶歯が認められた。当時の女性の平均身長が145cm、男性が155cmであることを考えると、大変大柄な女性であることがわかる（形質人類学的分析）。

頭部には、赤色と青色の顔料が散布されており、科学分析の結果、辰砂（硫化水銀）と藍銅鉱であることがわかっている。後者の産地は遺跡付近であるが、前者については、ペルー中央高地ワンカベリカ地方であることが推定されている（地質学的分析）。

頭蓋骨近くには2対の金製品が見つかった。1対は直径6cmの耳輪（各約16g）であり、もう1対は11cm×26cmの逆三角形の耳飾り（各約50g）である。実測と写真撮影を完了したうえで、まず技術的観察を行った。とくに左右一対の金製耳飾りは、薄くのばした地板を鑿でたたいて紋様を浮出させる「打ち出し技法」が用いられていることが判明し、また左と右とで技術に差が見られた。右耳用の飾りは、左耳用の飾りに比べて、紋様の割り付けに均一さが乏しく、作業の途中で別の人物の手が加わった可能性が指摘された（考古学的分析）。

耳輪については、金の含有量が90から95%以内に収まり、耳飾り（68-80%）より高く、両者の間に明確な品質差が確認できた。また天然の砂金に含まれない銅の存在が確認されており、金製品が溶融による合金であることが推測された（蛍光X線分析）。

また被葬者の頸部と右足首付近には、貝製のビーズ玉が出土している。海産のウグイスガイ科の貝であることが同定された。また大腿骨付近を縛るように微少のビーズ飾りが大量に出土した。これもまたウグイスガイ科である（海洋生物学的分析）。

### (5) 考察：I期とII期の権力の比較

すでに述べたように、I期では、余剰生産物のコントロールは認められないが、イデオロギー面への投資は大きかった。しかしその場合でも社会的不平等性は見あたらず、構成員の自主的な参加に基づく祭祀活動（神殿建設・更新）であったと考えられる。

これに対して、II期では、中心的な基壇の上にアクセスを限定された部屋群が築かれ、

またその部屋の床下、しかも建築の中心軸から特殊な墓が発見された。その貴人墓からは、金製品や海産の貝製ビーズ玉、辰砂など、特殊な材料や製品が出土しており、総じて II 期において社会的地位の高い人物が登場し始めたことがわかる。石彫における人間と動物図像の融合も、具体的な権力者が超自然的存在をコントロール、もしくは媒介し始めたことを示している可能性はある。

そうした社会的地位の高い人物が、辰砂や海産の貝類など奢侈品を長距離交易によって入手した点は、権力の掌握につながったと考えられるが、本研究では、それ以上に金属生産とその分配が重要であった点が明らかになった。先述のクントゥル・ワシ遺跡と比べても、奢侈品の量は少なく、またそれ以上に、銅を中心とする金属製品の出土が多いからである。その際、原材料や製品の運搬にラクダ科動物が利用された可能性もある。

さらに祭祀についても、広場という新たな空間の利用ばかりでなく、トウモロコシというアンデスの祭祀では欠かせぬ植物の導入は、世界観の変革が起きた可能性を示唆する。

このように、アンデス文明初期の権力者は、従来の唯物史観に基づく文明論から導き出されるイメージとは大きく異なり、経済面や軍事面のコントロールは脆弱であり、主として祭祀面のコントロールを基盤にしていたばかりでなく、同じ祭祀面のコントロールにも多様性があつたことになる。パコパンパ遺跡の場合、それが儀礼に関わる金属製品の生産であった可能性が高く、これまで日本調査団が調査してきた遺跡とは状況を異にする。

これまで欧米研究者は、文明初期の祭祀センターの外見的特徴や出土遺物の類似性に基づき、影響関係や範囲などを設定してきた。本研究の成果は、こうした姿勢に警鐘を鳴らす画期的なものであり、文明形成には多様な道筋があり、しかもそれらが相互に関係し合うという状況に目を向けるべきである、という点を明示した。

今後は、本研究で得られた考察を基に、より広い範囲を比較対象とし、権力生成の多様な軌跡を追究していく予定である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 26 件)

- ① Yuji Seki, Juan Pablo Villanueva, Masato Sakai, Diana Alemán, Mauro Ordóñez, Walter Tosso, Araceli Espinoza, Kinya Inokuchi y Daniel Morales, “Nuevas evidencias del sitio arqueológico de Pacopampa, en la sierra norte del Perú”, *Boletín de Arqueología PUCP* 12: 69-95, Lima: Pontificia Universidad Católica

del Perú, 査読有, 2010.

- ② Tomohito Nagaoka, Yuji Seki, Juan Pablo Villanueva, Walter Tosso Morales, Kinya Inokuchi, Mauro Ordóñez Livia, Diana Alemán Paredes, Daniel Morales Chocano, “Human skeletal remains from the Pacopampa site in the northern highlands of Peru”, *Anthropological Science*, 117(3), pp. 137-146, 査読有, 2009.
- ③ 関雄二、「古代アンデス社会におけるエリート誕生と工芸品生産」、『國學院雑誌』、109 卷 11 号、pp.165-183、査読無、2008.
- ④ Masato Sakai, Juan Pablo Villanueva, Yuji Seki, Walter Tosso y Araceli Espinoza, “Organización del paisaje en el Centro Ceremonial Formativo de Pacopampa”, *Arqueología y Sociedad*, 18, pp. 57-68, 査読有, 2008.
- ⑤ 関雄二、「ジャガイモとトウモロコシ : 古代アンデス文明における生態資源の利用と権力の発生」、『生態資源と象徴化』弘文堂、pp.209-244、査読無、2007.
- ⑥ 鶴澤和宏、「先史アンデスにおけるラクダ科家畜の拡散」、『生態資源と象徴化』弘文堂、pp.99-130、査読無、2007.

[学会発表] (計 46 件)

- ① 関雄二、ディアナ・アレマン、鶴澤和宏、長岡朋人、坂井正人、ダニエル・モラーレス、フアン・パブロ・ビジャヌエバ、マウロ・オルドーニェス「ペルー北高地パコパンパ遺跡における宗教的権威の交代」古代アメリカ学会第 15 回研究大会、早稲田大学戸山キャンパス、2010.12.4.
- ② K.Uzawa, “From hunting to herding: zooarchaeological approach to the subsistence change in the circum-Pacific areas”, Association for environmental archaeology annual conference 2010 in Kyoto, 2010.12.1.
- ③ K.Uzawa, Y. Seki, D. Aleman & M. Oldóñez, “Prehistoric dispersal of domestic Camelids in northern highland of Peru”, 11th International Conference of Archaeozoology, at Pierre et Marie Curie University Paris VI in Paris, 2010.8.25.
- ④ Yuji Seki, “Diversidad del Poder en la Sociedad del Período Formativo: Desde el Punto de Vista de la Sierra Norte del Perú”, 50th Annual Meeting of the Institute of Andean Studies, Wurster Hall, University of California, Berkeley, 2010.1.7.
- ⑤ 関雄二、ディアナ・アレマン、鶴澤和宏、長岡朋人、荒田恵、坂井正人、ダニエル・モラーレス、フアン・パブロ・ビジャヌエバ、マウロ・オルドーニェス、「ペルー北

高地パコパンパ遺跡における墓の発見」古代アメリカ学会第14回総会研究大会、南山大学、2009.12.5。

- ⑥Yuji Seki, Daniel Morales, Diana Alemán, Tomohito Nagaoka, Kazuhiro Uzawa, Megumi Arata, Juan Pablo Villanueva, Masato Sakai, Mauro Ordoñez, “Descubrimiento de la tumba principal de Pacopampa”. XVI Congreso Peruano del Hombre y la Cultura Andina y Amazónica, Universidad Nacional Mayor de San Marcos, Lima, 2009.10.29.
- ⑦Yuji Seki y Juan Pablo Villanueva, “Cambio del poder en la sociedad del Periodo Formativo: desde el punto de vista de la sierra norte del Perú”, 53º Congreso Internacional de Americanistas, Ciudad de México, 2009. 7. 20.
- ⑧瀧上舞、関雄二、長岡朋人、Juan Pablo Villanueva、井口欣也、Mauro Ordoñez Livia、Diana Alemán Paredes、Daniel Morales Chocano、向井人史、米田穰、「ペルー北部地域における形成期の遺跡間の食性差」、第63回日本人類学会大会、2009.10.3。
- ⑨Yuji Seki, “Establecimiento del poder en la sociedad del Período Formativo: desde el punto de vista de la sierra norte”, Taller Conmemorativo por el Cincuenta Aniversario del Proyecto Japonés de Investigación Arqueológica en los Andes “Centro” y Procesos Sociales”, Museo Nacional de Etnología, Osaka, 2008.11.29.
- ⑩Kinya Inokuchi, “Cronología del Período Formativo de la sierra norte del Perú –implicancias del caso de Kuntur Wasi–”, Taller Conmemorativo por el Cincuenta Aniversario del Proyecto Japonés de Investigación Arqueológica en los Andes “Centro” y Procesos Sociales”, Museo Nacional de Etnología, Osaka, 2008.11.29.
- ⑪Masato Sakai, “La Transformación de la Representación Zoomórfica y Sociedades en el Período Formativo”, Taller Conmemorativo por el Cincuenta Aniversario del Proyecto Japonés de Investigación Arqueológica en los Andes “Centro” y Procesos Sociales”, Museo Nacional de Etnología, Osaka, 2008.11.29.
- ⑫Yuji Seki, Juan Pablo Villanueva, Walter Tosso, Araceli Espinoza, Kinya Inokuchi, Masato Sakai, Mauro Ordoñez, Diana Alemán y Daniel Morales, “Nuevas evidencias del sitio arqueológico de Pacopampa, sierra norte del Perú”, VI

Simposio Internacional de Arqueología “El Periodo Formativo: Enfoques y Evidencias Recientes (Cincuenta Años de la Misión Arqueológica Japonesa y su Vigencia)”, Pontificia Universidad Católica del Perú, 2008.9.5.

[図書] (計5件)

- ①関雄二、同成社、『アンデスの考古学 改訂版』、2010、323頁。
- ②大貫良夫・加藤泰建・関雄二編、朝日新聞出版、『古代アンデス 神殿から始まる文明』、2010、296頁。

[その他]

- ①国立民族学博物館ホームページ  
<http://www.minpaku.ac.jp/research/sr/19251013.html>
- ②墓についての主な報道  
El Comercio 紙 2009/9/15; La República 紙 2009/10/4; 読売新聞朝刊 2009/9/21; 朝日新聞夕刊 2009/9/21; 産経新聞大阪版朝刊 2009/10/25; 毎日新聞大阪版朝刊 2009/12/17; NHK ニュース 2009/10/22

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

関 雄二 (SEKI YUJI)

国立民族学博物館・研究戦略センター・教授

研究者番号：50163093

### (2) 研究分担者

井口 欣也 (INOKUCHI KINYA)

埼玉大学・教養学部・教授

研究者番号：90283027

坂井 正人 (SAKAI MASATO)

山形大学・人文学部・教授

研究者番号：50292397

鶴澤 和宏 (UZAWA KAZUHIRO)

東亜大学・人間科学部・教授

研究者番号：60341252

米田 穰 (YONEDA MINORU)

東京大学・大学院新領域創成科学研究科・准教授

研究者番号：30280712

長岡 朋人 (NAGAOKA TOMOHITO)

聖マリアンナ医科大学・医学部・講師

研究者番号：20360216

(H20→H22：連携研究者)